

# 蒼空高く翔らむと

(昭和二年寮歌)

土井恒喜君 作歌  
長谷川吉郎君 作曲

一

蒼空高く翔らむと  
暫しやすらふ楡の蔭  
力は胸に溢れつつ  
翼つくろふ思かな

四

若きに芽ぐむ数々の  
深き苦悩は身にあれど  
迪を恵ねて辿りゆく  
遊子の真意君知るや

七

花咲き散りて五十年  
寮庭の桂も年ふりぬ  
先人の影とほけれど  
遺訓や永久に薫るらん

二

朝曠野の露を吸ひ  
夕北斗の曙きに  
驚き瞪る幼鵬の  
清き眸君見ずや

五

茫々千里石狩の  
野は澄みわたる銀の  
雪さんらんと散るところ  
われらが魂の故郷かな

八

北溟城の生活に  
桜と星の旗かざし  
相寄りむすぶ三百の  
志は高きわれらかな

十

ああ碧落に永劫の  
北斗の光かげさえて  
清き三年の思出の  
銀觴の酒つきざらん

三

うら若き日の悦びを  
はかなきものと誰かいふ  
理想の潮湧き出づる  
生命の海の高鳴るを

六

若き勇者よオキクルミ  
熊をはふりて饗宴せし  
短檠すでに光消え  
東の空はかぎろひぬ

九

こよひ手稲に日は落ちて  
新月細くかがやけば  
青き煙のそが中に  
ほがらかになる楡の鐘